

---

# ぼくの箱庭

よしひと

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ぼくの箱庭

### 【Nコード】

N1321C

### 【作者名】

よしひと

### 【あらすじ】

ぼくはからだが小さいらしい。だからぼくは、からだがいぶ大きな人に、この小さな箱庭で育てられてきたのだ。と知っているけれど。

ぼくはどうも人よりからだが小さいらしい。

だからぼくは、ぼくよりもだいぶ大きな人に、箱の中で育てられてきたのだ。

ただ、ぼくはその人が、ぼくよりもだいぶ大きいということを知っているだけで、ほかの、声や顔についてはなにも知らない。

すこし前にやってきた髪の毛の長い女の人が、その長い髪をゆらしながら「人はひとりでは生きていけないのよ」と言っていたので、じやあぼくが今生きているのは、この箱の外からぼくを見てくれる人がいるからだとわかったのだ。

箱の外からぼくを育てるためには、だいぶからだが大いか、羽根でも生えていないとできっこない。人間に羽根は生えていないので、残ったほうの、からだがいぶ大きい人とぼくは思うことにした。

この箱の中には時間がない。朝もなければ夜もない。いつも真っ白な色につつまれている。

だからぼくは、眠たくなるとよこになり、眠りが浅くなるとからだを起こす。眠っているあいだは、大抵この箱の中と同じ白い色の中にいるけれど、たまに夢を見ることもあった。夢の中でぼくは、ふわふわと宙を飛んだり、見たこともない場所において、会ったこともない人と話をする。話の内容は、目が覚めると忘れてしまうのだけれど。

いつか真っ白な服を着た男の人がやってきて、「夢に見たものは、自分となんらかの縁があるものなんだよ」と言っていた。

ぼくは胸がドキドキした。

じやあぼくは、いつか飛べるのかもしれない。たくさん色彩があふれる場所で、たくさんの人と話をするんだ。

そうしたら、そうしたら、そうしたら……

この箱庭はどうなるんだろう。

ぼくをずっと見てくれていて、大きな人はどうするんだろう。大きい人は、ひとりにはならないのだろうか。

上を見上げながら、そんなことを考えていたら、ふわりふわりとだれかが降りてきた。右に左にゆれながら、紺色の長ズボンをはいたその人は、ふんわりとぼくの前に足をつけた。

「こんにちは」

水色のシャツのえりを直しながら、その人は言った。

「こんにちは。あなたは飛ぶことができるんだね」

「もちろん。飛べないと不便じゃないか」

「ぼくは飛べないよ」

「そうかい」

「あなたは人間じゃないの」

「さあね」

「人間は飛べないんだよ。ぼくは人間だから飛べない。あなたは人間じゃないから、飛べるんだ」

「きみは、人間なのかい？」

「え？」

「人間は、こんなせまい箱の中で生きることができないよ。だって大きいからね、入りきらないもの。たしかにきみは人間みたいな容姿をしているけれど、ぼくだってほら、そうだろう。人間に似ているけれど、飛ぶことができる。きみだってもしかしたら、飛べるかもしれないじゃないか」

えりをきれいに正せたのか、その人はふう、と息をはきひざをかめ、思いきり地面を蹴った。そして宙へと舞い上がっていった。

「どこへ行くの」

「外の世界さ」

「外の世界って、こことどうちがうの」

「外の世界にはね、空という、高い天井があるんだ。澄んだ水色をしていて、飛んでいると心が洗われる」

「外の世界には、なにがあるの」

「なんでもあるさ。空、海、街、太陽、月、夜……」

「ぼくも」

連れていって。と言おうとしたときすでに、その人は本当に小さな点になっていて、白い色の中に消えていた。

ぼくはしばらく動けずに、その人が点になった場所をずっと見上げていたけれど、いつのまにかじわりと涙があふれていることに気がついた。

からだの力が抜け、だらりとその場に倒れこむ。

「ぼくは、人間なの……。人間じゃないの……。どうして、飛ぶこともできないの……」

小さなからだ。

真っ白な箱の中で、たったひとりで生きるぼくは、いったいなんなのだろう。

寝返りをうち、真っ白な上を見る。そこには、なんの姿も見いだせない。

「ねえ、本当はそこには、だれもいないんでしょう。ぼくはひとりなんですよ」

ずっと思い描いていた、自分を人間だと思っていた、ぼくの妄想が生んだからだの大きなだれかに言う。

「ぼくはいつたいたいだれなの。教えてよ。教えてよ……」

ぼくはだれなんだ？

なぜこの箱庭で生きているんだ？

なぜここから抜けだすことができないんだ？

自分が何者かもわからなくなってしまうと、目に映る白い手も、髪の毛も、ゆびも爪も、すべてが気持ちわるく思えた。

自分の意志もなくくり返される呼吸も、どうしてなのかわからなかった。

悲しいところからともなくあふれだす涙が、どうしてしょっぱいのかも、うれしいとどうして口元がゆるむのかも、怒るとどうして

まゆが寄るのかも、ぼくにはわからない。

だれかに教えてもらった記憶なんてないのに、ぼくは自分でそのことを実行している。それが気持ちわるくて、怖かった。

そのまま仰向けで、ぼくは眠ってしまったらしい。気づけば涙はカラカラになって、ほほにあとを残しているだけだった。

「泣いていたの」

ぼつりとだれかが言う。ぼくはからだを起こし、辺りを見渡した。ひとりの女の子が、ふわふわのワンピースを身にまとい、そこに立っていた。

「きみはだれ。どこからきたの」

「わたしはイブ。外の世界からきたの」

「きみも飛ぶことができるんだね」

「わたしは飛べないわ」

「じゃあどうやってここにきたの」

「かべをすり抜けたの」

そう言って彼女は、くるりと回ってみせた。

「あなた、泣いていたわ。悲しいことでもあったのかしら」

「ぼくは……、ぼくは自分がだれなのか、わからないんだ」

イブは目をぱちぱちさせて、少し首をかしげた。

「ぼくは、自分をからだが小さい人間だと思っていた。だけどそれはちがったんだ。ぼくは人間じゃない。人間じゃないのに、飛ぶこともできない。じゃあぼくは、いったいだれなのか、わからないんだ……」

「人間じゃない人は、みんな飛ぶことができるの？」

「……」

「わたしは人間じゃないけれど、飛ぶことなんてできないわ」

イブは両手を、左胸に当てた。

「けれど生きている。それだけじゃダメかしら」

「……生きている」

「そうよ。悲しいと涙は出るし、うれしいと笑顔になるわ。怒ると

ムツとするでしょう。それはすべて、あなたが生きてるからなのよ」「ぼくが、生きているから……」

イブはにっこり笑った。

「わたしはもう行くわ。ここは、あなたの箱庭だから」

「イブ」

「なあに」

「ぼくも、きみも、生きています。からだ小さくても、飛ぶことができなくても、生きています。それだけは、一緒なんだね」

「一緒よ」

「そうだったんだ……」

イブはふわふわのスカートをゆらしながら、真っ白な色の中に消えていった。

ぼくは自分の手をほほに寄せた。あつたかくて、少ししめっていて、なんだかすぐくうれしくて、思わず笑顔になった。

生きているって、悲しくてうれしいことなんだな、と思った。

それから四度の眠りのあとだった。

上を見上げていると、どこからかだれかの走る音が聞こえてきた。

ぼくは辺りを見渡す。ふと、ひとりの男の子の姿が目に入った。男の子はぼくの目の前までやってくると、ぴたりと足を止めた。

「ぼくの名前はアダムといます」

「こんにちは、アダム」

「初対面のあなたにこんなことをたのむのは酷かもしれませんが……、ぼくのことを覚えてもらえませんか？」

不思議なことを言うんだな。

ぼくは首をかしげた。

「どうしてそんなことを言うの？」

「ぼくはもうすぐ、死んでしまうから……」

「死んでしまう？」

はじめて聞く言葉に、ぼくは反射的に問い返した。

「死んでしまうって、なに？」

「世界から存在が消えてしまっつてことです」

「存在が消えてしまっ！」

ぼくは目を大きく見開いておどろいた。

「そんな怖いことがあるなんて」

「なにもおどろくことはないですよ。それは生きているかぎり、かならずいつかは訪れることなんですから」

「そうなの……」

ぼくの胸はざわついた。それじゃあぼくも、イブも、からだの大きな人も、紺色のズボンをはいた人も、今まで出会ってきた人はみんな、いつか死んでしまっつのか。世界から、存在が消えてしまっつのか。

消えるっつていうのは、いったいどんな感じなんだろう。

「死んでしまっつ、から、覚えていてもらっつ必要がある……？」

ぼくがつぶやいた言葉に、アダムはこくりとうなづいた。

「ぼくたちがどうして生きるのか、あなたは知っていますか？」

ぼくは首をよこに振る。

「自分ではないだれかを知り、好きになるためです」

「好きに、なる、ため」

「いやなことは、すぐにでも忘れたいと思っつでしょう。けれど反対に、いいことは忘れたくないと思っつ。きれいな人のことは考えたくないけれど、好きな人のことはどんなときでも考えっつしまっつ……。生きるっつていうのは、だれかを好きになり、その人のことを忘れないことなんです」

だれかを好きになるために生きているだなんて、なんてロマンチックなんだろうと、ぼくは胸が熱くなっつた。

「生きるものはいっつか死ぬ。それは決められたことです。けれどだれかがぼくを忘れないでいてくれたら、ぼくはずっつとその人の心の中で生きっつづけることができる。世界から消えてしまっつても、その人の中からは消えることはない。ぼくは、そんなふう生きていた  
い」

顔をあげたアダムの顔が、今にも泣きだしそうに見えた。

「だから　どうか、ぼくのことを覚えていてください」

ぼくは、もしかしたらこの子も、ぼくと同じでずっとひとりきりだったんじゃないかと思った。

真っ白な箱の中で、たったひとりで生きてきたんじゃないかと思っただ。

ぼくたちが生きるのは、自分ではないだれかを知り、好きになるため。

ひとりきりの彼は、今までちゃんと生きていたのだろうか。

「きみは、ずっとひとりだったの？　だから、ここにきたの？」

ぼくは問う。

「だれかを知ること、好きになることもできなくて、さみしかったの？　こわかったの？」

アダムははっと思いつめたような表情になり、なにかをこらえるように下唇をかんだ。目の中で小さな星が光り、ぼくを映した。

「こわかったよ」

アダムが言った。

「こわい夢を見ても、だれもとにはいない。好きになりたいのに、ぼくはずっとひとり。手の形も声も体温も、ぼくは自分のものしか知らない。生きているのに、生きていないみたいで　さみしかったよ、こわかったよ」

ぼくは、そつとアダムの手をとった。

なんだかとてもつめたかった。それはぼくがはじめて知る温度だった。

「きみは、生きているよ。ぼくが覚えていて。きみが世界から消えてしまっても、ぼくは忘れない。きみはこの世界で生きて、そしてぼくの心の中でも生きるんだ」

つめたいアダムの手が、ぼくの手を握り返す。

ふいに、やわらかな光がアダムを包みこんだ。まぶしいはずなのに、ぼくはアダムから目を離さなかった。

「ぼくもあなたのことを忘れません。ぼくははじめて……生きる」とができた」

ありがとう。

アダムがそうほほえんで言うのと、光がはじけるように辺りに散らばったのは、ほほ同時だった。

目は開いているのになにも見えなくなり、気がつくときアダムは消えていた。

視界に広がるのはいつもと変わらない、箱庭の真っ白な風景。

その中に、もうアダムの姿はなかった。

「けど、アダムは生きているんだ」

手のひらを見つめる。

「ぼくも、生きている」

そしてゆっくりと握りしめた。

ぼくはからだが大いぶ小さい。

だから大きな人につぶされないように、この小さな箱庭の中で生きてきた　と思うことにした。

ぼくは自分がなぜここにいるのかも、なぜ小さいのかも知らない。ただわかるのは、生きていくということだけだ。

イブも生きていく。

アダムも生きていく。

ぼくが今まで出会ってきた人は、みんなだれかを知り、好きになるために生きているということだけだ。

けれどそれだけで充分じゃないかと思う。

空もないし海もないし夜も月もないけれど、小さな箱庭の中で、小さなぼくは生きていく。

(後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。

ぼくの箱庭

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1321c/>

---

ぼくの箱庭

2008年8月29日17時20分発行